靖国神社　社頭の雪
（昭和49年2月6日）

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦没者遺族会）
郵便番号 154
世田谷区野沢3—11—3
電話 東京（421）3614
振替口座東京93487番
編集兼発行人　浮田信家

クェゼリンの皆様えの感謝

佐賀　山田文子

かねがね申し訳もなきお無沙汰申し上げおります。今度のお手紙によれば、かねてご英霊、ご遺族の為にと、崇高なるご精神に基き、お心お砕き下さいました賜物としてクェゼリン、ルオット両島へのご上陸の宿願叶えられ、親しくご参詣頂きました由、有難き嬉しき内容に接しました。感謝感激、涙して仏前に報告致しました。

ご英霊の皆々様久方ぶりに日本からはるばるたづねられたあなた様に30年ぶり、声なきお目もじ如何ばかり、お嬉しく感泣遊ばしお喜こび頂きましたことと想像申し上げ、涙に咽びました。後日細やかな御報告いただけます由、楽しみにお待ちして居ります。なみなみならぬご努力にたいしお礼の言葉もございません。有難く厚く御礼申し上げます。

（49・3・18受）

昨日はご鄭重なるお手紙賜りまして誠に恐縮に存じました。早々貴重なる得がたきお写真まで賜り感激の中に、お手紙と共に照し合せまして度々繰り返し拝見申上げました。長く保存し拝見いたします。有難く御礼申し上げます。ご英霊の皆様方のお悦びさこそと存じ上げます。

承りますれば、ルオット島までご同道下さいました和子チェンバレンご夫人と同島を進んでお護り下さるセラフィン陸軍大佐のお二方様が、異国に眠るご英霊に対し奉り、肉身すら及ばぬ、優しく、美しく、崇高なご精神で、日々のご参拝、ご清掃いただき、お慰め戴くと伺い、有難く感謝感激の極でございます。御礼にふさわしい言葉をわきまえません。ただただ有難く感謝の気持ち一ぱいで、遙かに合掌致し、涙して御厚情の御礼申上げますものでございます。私も年老いまして字も上手にもかき得ませず、心の万分の一の御礼をも書けず誠にわがままにて申しわけなきことと存じますが、浮田様よりお序での折くれぐれもよろしくお伝へくださいませ。勝手をお許し下さいませ。御礼まで。

かしこ

（第24航空戦隊司令官山田道行海軍中将（ルオット島にて玉砕戦死）夫人。唐津市西城内四の十一）

目次

クェゼリンの皆様え捧げる感謝……山田　文子(1)
マーシャル戦記—その六—……木ノ下　甫(2)
現地訪問希望について再び
お尋ね……(3)
松本国雄様の御苦労に感謝……(3)
訃報—篤志会員有馬成甫様……(4)
現地だより(一)　カズコ・チェン
ジャボール島の想い出……バーレーン様(4)
現地だより(二)……遠藤　清巳(5)
会員だより……中田イサム(5)
勲六等旭日章の悦び……林　文枝(6)
村上前会長を悼む……松木ミチル(6)
戦記シリーズ新掲載について……(6)
新入会の喜び……露木　千鶴(7)
靖国の妻……安藤　サヨ(7)
親から受け継いだもの……井上賀雄(8)
三十年の想い出を偲んで……高林　セキ(8)
こぼれ文……(8)
リッサングサングさんに送る……浮田　信家(9)
昭和50年2月6日の御案内……佐藤　宗丕(10)
寄附者芳名……(11)
事務局だより……(12)
年賀……(12)

マーシャル戦記
—その六—（最終回）

木ノ下　甫

9月2日（昭和17年）
日記
「大艇午後クェゼリン発、ルオットに至りて一泊、夜、持参の映画をやる」
9月3日
日記
「早朝ルオット発、イメージ（ヤルート環礁内の島）島に寄って燃料を補給し、一路南下、12時タラワ着。午後タラワ陸上視察。美しき平和なる村。教会堂、美しき尼僧。戦いの中にこの平和あり。心痛む。又白人の宗教家の熱意に感動す。夜大同丸に一泊。」
9月4日
日記
「早朝発。アパママに飛ぶ。遠浅の海岸二千米。南水道を調査す。烈日の下、水青く岩黒し。帰って島に上る。島民集って踊る。小さい子供の腰みの姿愛らしい。菓子をわけてやる。捕虜3名（電信員）、牧師2名。タラワに帰って一泊。」
9月5日
日記
「朝またタラワ陸上測量。仲々帰らず。遂に9時、漸く離水。イメージにて横六特司令に逢い、ルオット経由。夕刻クェゼリン帰着。」
9月6日
日記
「以後タラワ、アパママ問題もみにもむ。9日に至るも未定。」

マキン来襲の米海兵隊は金光隊長の果敢な反撃で、遂には同志討までやって一部の海兵隊を島に残したまま、撤退したが、これを機として、米軍の反攻に備えて、マーシャル、ギルバート諸島の防備強化が急がれることとなった。そこで24航空戦隊の参謀と共に、九七式飛行艇でタラワに飛ぶこととなったわけであった。タラワは開戦直後、駆逐隊の陸戦隊が占領して、英軍の通信所を破壊しすぐ引揚げたまま、放置してあった。従って島民も戦争の圏外で平和な生活を楽しんでいたのである。タラワの視察の結果、ここには飛行場もできるし、南太平洋方面第一線基地として、戦略上重要な島であることが確認された。

「タラワ、アパママ問題もみにもむ」というのは、この防備強化の具体策として、陸軍部隊の増派とか、航空隊の進出とか、防備要塞の性格等について、意見が別れ、仲々結着を見なかったのである。

結局ギルバート諸島の防備は、思い切って最大限の兵力を配することとし、ここには第三特別根拠地を新設して、タラワを中心にし、マキンに一部兵力を配して防備を強化することになった。そのとき、敵艦艇による砲撃を撃退するため、シンガポール要塞から8吋の砲台二基を基幹とし、その他数門の重砲を移すことにした。柴崎恵次中将が司令官として、さきにマーシャル方面に進出した横須賀第六特別陸戦隊に更に、佐世保第七特別陸戦隊も加えられて、タラワに三千名、マキンには五百名の、我海軍陸戦隊の精鋭部隊が配備完了したのは、翌18年3月であった。陸軍部隊の増派は、ウェーキ島に南海第3守備隊を置き、南海第4守備隊はクェゼリンに本部を置き、マーシャル方面の第一線に増強されることとなった。これが完了は8月中旬であった。これらの防備強化の原案が一応でき上った10月10日附の電報で、私は横須賀鎮守府附に転任発令があり、18日、思い出多いクェゼリンを去ることになった。トラック、サイパンを経て、帰国したのは10月24日であった。

◇

征南万里海　踏破両洋間
三歳無功去　秋風還故山

◇

南東第一線の防衛の任は終ったが、今度は第五艦隊参謀で、北海のアッツ、キスカ方面での惨烈な戦場が待っていた。6回にわたり連載されたマーシャル戦記は、これで終りであるが、最後にタラワ守備隊の敢闘について特筆したい。柴崎中将麾下の海軍陸戦隊は正しく我海軍最強の守備隊であった。これに対したのは、米海軍最強の第2海兵師団であった。

我三千の守兵の6倍に近い一万七千余名の海兵隊に対し、戦死九九三名、負傷二二九六名。合計三二八九名の死傷者を出さしめて、米海軍だけでなく米国民を驚かせたその死闘は、ロバート・シャーロッドの著書「タラワ—恐るべき戦闘の記録—」を不朽の戦記文学とした。一従軍記者としてこの上陸戦に参加した著者は、両軍の戦況を公平に記しているが、それは彼の想像を絶するものであった。

空母や戦艦、巡洋艦、駆逐艦多数の砲爆撃は、実に三千屯の爆薬をこの小さな島に注ぎ込んで、それこそ一人の生存者もあるまいと思われたのに、実はほとんど被害はなかったのである。

椰子の木を連ねて作った防壁の間に三尺の砂の層を作ったトーチカは、よくこの猛攻撃に耐えたのであった。しかも日本守備隊は、米軍の上陸を迎えるや一斉にその上陸用舟艇や水陸両用戦車を猛撃して、その半数以上を破壊し、僅かに上陸した部隊は海岸の20呎の死角にへばりついたまま、少しも前進できなかったのであった。しかもその水中に破壊されて立往生している舟艇や戦車に、日本兵は、真裸で水中を

もぐって泳ぎつき、その中に飛び込んだが、やがてそこにあった機銃を整備し、つづいて上陸して来た米軍や、その軍需品置場を海上から急射して大混乱を起させたのである。

この第一日の戦況は、明らかに上陸軍に不利であった。もしこの第一夜に、我守備隊が全軍夜襲をもって水際の橋頭堡を攻撃したならば、容易にこれを海中に追い落し得たであろう。ここに、さきの三千屯に及ぶ砲爆撃の効果があった。それはこの日正午頃、直撃弾が司令部壕に命中し、司令官以下全員戦死し、更に各部隊間の連絡用の電話線や無線電話の送受信機が、破壊されて、全島の統一指揮が不可能になっていたのである。このために第一夜の組織的な逆襲は行われず、その間に増援軍の上陸を許してしまったのであった。

このタラワの激戦は日米双方に大きな教訓となった。攻撃前の砲爆撃の効果が、人員殺傷の点では効果が少ないことが判明したので、米軍は更にこれを強化することとした。

クェゼリン島の攻撃には、実に一万五千屯の爆弾と砲弾が注ぎこまれた。物量を誇るこの攻撃の前に、海面上二米位しかない珊瑚礁の小さい島を守り抜くことは、到底不可能なことであった。僅かの兵力ととぼしい弾薬食糧で、あらゆる悪条件の中で、飢餓と戦い、敵と戦いながら、終戦まで頑張りつづけた戦友と、途中に斃れていった多数の英霊に心からの敬意を捧げて、この小記を終る。

現地訪問希望について再びお尋ね

―叶えられるなら墓参も―

事務局

このことについて本誌21号（3頁）でお尋ねしましたところ今日までに（五十音順）（敬称略）安藤サヨ・井上賀雄・池田徳太郎・植田操・浮田信家・大高吉郎・国松ふみ江・小泉文江・佐竹エス・佐藤宗丕・白井まさ子・鈴木つな子・高林セキ・藤田きよせ・松本国雄・山下ミツコの16氏家族を加え23名の希望者がありました。

この外にご希望ありましたら、12月31日までにお申出下さい。一月に入ったら具体的な交渉をはじめます。現在の希望する計画の概要は

所要期間　十日以内

行動　東京―グァム―クェゼリン―マジュロ―ハワイ―東京

経費　30万円内外

本件についての今後の連絡は、希望お申出の方だけにお送りします。

新会員松本国雄様の御苦労に感謝して

事務局

本年7月17日南太平洋友好協会（京都花園大学々長山田様が会長）の松田カウ子様から、同協会主催の慰霊行事中「8月21日大阪空港発、グァム、トラック、ポナペ、クェゼリン、マジュロ、サイパン、テニアンをまわり、各地で慰霊祭を行い8月29日羽田着の計画がある。参加希望者があれば知らされたい」との問い合せであった。遺族には補助支給とのこと、かねて現地訪問希望申出の方には速報したが、日時に余裕がなく希望者はなかった。

ただ同協会からは、現地の現情について本会々長に屢々指示を求められた経緯もあって8月11日の壮行会には列席し質疑に応じた。参加員中御令弟をクェゼリンの玉砕で失はれた松本国雄様がおられた。

偶然ながら松本様は今年2月6日の本会慰霊祭に参加され、新たに入会された方であった。

そこで願ってもない好機なので、昨秋クェゼリンでお世話になった方々に会員章や写真等をお届けいただくようお願いした。

そして予定通り大阪を出発され、30日にお電話をいただいた。目的を果し、ご帰国のおしらせかと胸をとどろかせた。しかし意外旅行社の手違等があってトラック島に三日滞在しただけで、それ以外の島には行けず空しく帰京された由であった。クェゼリン島へ托送品の届けられなかった責任は旅行社にありとし、旅行社の手でクェゼリンに空輸された。

本号に掲げるチェンバーレーン和子様からのお便りは、こうした経緯で一週間ほどおくれて届いたのであった。目的を果せなかった松本様にはお気の毒であったがこうしてクェゼリン島の方々にお届け下さったご苦労に対し深甚の御礼を申し上げる次第である。

前夜祭のご提案

佐世保　林　文枝

私のように十年に一度位しか参加出来ない事情の方も多くおありと存じます。直会旅行も結構でしょう。けれども何日もかかることですし、前夜祭に慰霊祭の重点をお置きいただき、会員遺族の方々と心ゆくまでお話致しとうございます。

本部より。ご意見ありがとうございました。ごもっともと存じ、早速実行いたすこととしました。10頁2月6日の行事予定ご覧下さい。多数のご参加をお待ちします。

本会会員松本国雄様にお願いし環礁・会員章・写真等お贈りした礼状

クェゼリン本島
カズコ・チェンバーレーン

前略ご免下さいませ。

日本は初秋の候かと存じます。皆々様お変りもなくお過しでいらっしゃいましょうか。

私共七月中旬から八月下旬にかけて休暇で米本土へ参り留守にいたしておりました。帰宅後お便り拝見いたしました。環礁もたしかに入手致しました。早速お返信申し上げなくてはならないと心にかけながら一ヶ月以上も留守にしており、その上、当島の契約更新で、引続いてグローバル（GLOBAL）が契約を得ましたが、矢張色々と人事異動等もございまして、私も早速勤務しなくてはなりませず、日々あわただしく過して、御返事が大変おくれましたこと何卒お許し下さいませ。

又先日ご通知の松本国雄様も当日飛行機が延着で大変気をもみましたが、結極お見えにならなくて、本当に残念でございました。トラック島からお送り下さいましたおことづけの品々たしかに入手致しました。

私の知らない方々も多く、徳原様に手伝っていただいて各自封筒に入れ、皆様にお届けいたしました。

ミスター小野はもうここにはいらっしゃいませんし、届け先も不明でございますので、その分としてミセス、艶子・バトラー（墓参の折お会いになられたと思います。お弁当を持っていらした方です）に差上げる事に取計らいました。

それからロイ・ナムル島でテーブルや飲物の用意をして下さったお二人の方にも御礼の意味をこめて差上げました。皆さん大変喜んでいらっしゃいます。

それからロイ・ナムル島で、私共を車で島中見せて下すったMr.REDMONDこの方へも一組環礁とバッチお贈り致しました。Mr. SERAFINEの事務所にいらっしゃいますので、その様に致しました。貴会の感謝の御気持が協力して下すった方々に洩れなくと考えて取計いました。何卒御了承下さいませ。

Command Lussel（ラッセル司令官）も現在非常にご多忙の御身でございますのでMr. Beavereに御誌の内容そしてバッジの説明申上げてお渡し下さるようにお願い申し上げました。

山田文子様のお手紙はロイ・ナムルのMR. SERAFINEにお見せして、その後御返送申し上げます。また私お会いする機会が御ざいませんのでChamberlain（註・筆者のご主人です）に言告（ことつげ）を頼んでありますので一両日中にお渡しできると思います。

勤務時間がすべて変更になり、私も早朝四時出勤でございますので、まだなかなか時間の繰合（くりあわ）せが思うようになりませず雑事に追い廻はされております。

一ツ良いお知らせがございます。グローバルの総支配人が交替になり、ご存じの以前のマネージャー、ミスターマカフィーが又戻っていらっしゃいます。この度の契約は大変むつかしい条件が数々あり、彼の手でなかったら切りまわせないからでございましょう。十月一日より交替でございます。現在すでにいらっしゃいますが、主人も古い古いお知り合いでございますが当分の間はごあいさつも控えておるつもりでございます。当面の山積した頭の痛いお仕事にいっぱいの彼をわづらはさない様と主人も申しております。

いづれにいたしましても旧知のマカフィー様が戻っていらした事は今後何かと御心強い事と存じますのでお知らせ申上げます。

中田様明日休暇でハワイにお帰りになり十七日日本にいらっしゃるとのことでございます。環礁とバッヂ差上げておきました。

ミセスサツキイグナムには郵送いたしました。当島の皆様からのメッセイジ等もその内とりまとめましておしらせ申し上げます。

只今私のランチタイムで帰宅、取急ぎその後のご報告のみ走り書にてお知らせ申し上げます。乱筆何卒お許し下さいませ。

お彼岸もまぢか。おはぎをこしらえてお参りにと徳原様、デービー様と話しております。

気候の変り目何卒御身御自愛の程。

チェンバーレーン・和子

一九七四年九月九日

（本会々員松本国雄様に托送した環礁・会員章等を受領して）

訃　報

本会創立以来本会育成のため大変お世話下さいました文学博士・元海軍少将有馬成甫様が昨昭和48年8月24日に御逝去になりました。同先生の環礁3号から9号にいたる連続6回に亘るクェゼリン環礁警備日誌は戦争の最中、昭和18年4月25日から9月18日に至る約半年の経過を、全く知らない私達遺族に肉身の者の当時の日々の様子をお聞かせ下さいました。ご芳志を厚く御礼申し上げ、御冥福を心からお祈り申し上げたいと存じます。

ヤルート環礁ジャボール島の想い出

遠藤清巳

先日はお手紙並びに環礁合併本、会員章、スナップ写真ありがとうございました。合併本を戴きましてから、第一集を三日がかり、第2集もやはり三日がかりで読了いたしましたが、時には朝6時まで徹夜で読ませていただきました。

それと申しますのも、記事の内容が、私の過去に大変関係があったからです。丸の内の郵船ビル地下室で海図を買いまして、その海図と首っ引で熟読致しました。実は私昭和13年11月にヤルート環礁ジャボール島へ知人のコプラ移入商売を手伝いに行ったのですが、当初二年か三年で帰国するつもりでしたが、開戦となり、帰れなくなって終戦まで軍のお手伝いをしておりました。昭和13年に渡南いたしましてから会社の持船（50トンの木造機帆船）で各離島へコプラの買付けに廻っておりました。この仕事は13年から17年頃までだったと思います。コプラが内地へ送れなくなったので、船ごと軍の仕事をすることになり、クェゼリンやミレー、ウオッゼ等へ少量の荷物を運搬致しておりました。昭和18年より空襲がひどくなり、私は下船致しましたが最後の仕事に出た船はとうとう帰って参りませんでした。

この様な事情でマーシャル諸島の大きな島には、島民にも知った者がおりますし、彼等の生活には馴れておりますので、浮田様や佐竹様の訪問記事を拝見いたしまして、ドラム缶の水、ヤシの葉の住居、野外食堂等お二人には驚きであったと思いますが、私にはなつかしい事ばかりでした。

お手紙にありましたマサオは多分ヤルート支庁警務部に属しておりました方と思います。日本人の警官の助手で「巡警」と云う名称でありました。勿論お会いすれば先方でも知っておいでと思います。

又ラタック列島の大酋長トメイン氏が亡くなったようですが、彼は非常な親日家で温厚な紳士で囲碁をよくなさいました。軍にも大変協力された方でした。

いろいろ想い出はつきませんが、環礁本当にありがとうございました。自分が行って来たような気持ちになってしまいました。

次に戦死した兄の縁で入会させていただきたいと思い、お送りいただいた振替用紙で払込み致します。内訳は左記のとおりですのでご査収願い上げます。

記

一環礁合併本代（二冊分）	一〇〇〇円
二スナップ代	五五〇円
三送料（霊砂送料二五〇円）	四五〇円
四会費（49・50年分）	二〇〇〇円
五寄附金	二〇〇〇円
計	六〇〇〇円

尚霊砂についてですが、ブラウン島のがありましょうか（兄戦死の島）もしなければ他の島のでも結構ですのでお送り賜りたくお願い申し上げます。

次に私の兄ですが

海軍上等主計兵曹　沢田正巳
本籍　熱海市熱海三二七
特設捕獲網艇桂丸乗組
昭和19年1月31日午前九時ブラウン島附近において敵機の攻撃を受け、沈没の際戦死

（昭49・8・4）

◆現地だより◆

中田イサム

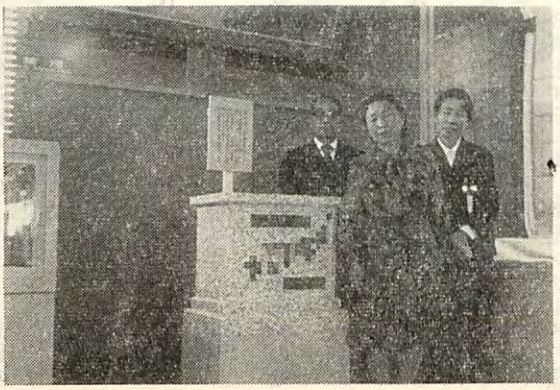
その後お元気ですか。今は南洋で、暑い毎日仕事をしています。先日日本に参りましたとき、あなた達のお世話になって、とても楽しい毎日でした。どうもありがとうございました。本当に夢のように思っています、日光での綺麗な空気、景色など、きれいな旅館や、又は色々なお食事本当に楽しく思います。そして東京でお豆腐の料理など色々なところにお連れいただき極楽のように楽しみでした。

環礁ミレー抄(12)

成宮芳三郎

休日の静けさここに
ありと言はむ
夏陽かがやく一月一日

（元66警ミレー軍医長）



副碑
左から昼間幹事　山田あき様　小泉幹事

会員だより

勲六等旭日章の悦び

林　文枝

さて今年正月戦歿者叙勲の件でお尋ね申し上げその節は、お力添えを頂き、お示し通り、県民生部その他に手続き等致しました。その結果仰せの通り、本日佐世保市公会堂において、勲章伝達式が行われました。

勲六等単光旭日章を勲記と共に戴き感無量の思いでございました。

一家の大黒柱は戦死し、その留守を守っていた家族は戦火に焼き出され、辛うじて生き残った遺族が身を寄せて棘の道を辿って生き続けてまいりました今日、手に致しました勲章の尊い重みは永久に帰りませぬ夫と共に終生通い続ける、日本人の魂の慶びとでも申しましょうか、後から後から、とめどもなく、熱いものが、こみ上げて参ります。

然し事務的に合理的に簡略な形式のみの伝達で、僅かな戦歿者遺族と、多勢の喜びの生存者叙勲とを同時に催されたことに、生きてさえいれば、亡夫もこの位の年輩の人になっておられたろうにと、何か空しい思いで悲しうございました。それにしても本部にお願いしたればこそ、今日の伝達にまで漕ぎ着かせていただけたと、一入マーシャル方面遺族会の存在が、如何に御英霊の御魂一つに結ばれ素晴らしいものかを、改めて認識させていただきました。本当にありがとうございました。

今日の感激を真先にお知らせいたさなければと、急ぎペンを走らせました。

（48・11・21）

村上前会長を悼む

愛媛　松木ミチル

七月の環礁で知りましたが、前会長村上様がおなくなりになられたそうでございます。心からお悔み申し上げます。何年か前に会長が私に、それは優しいはげましのお言葉を、お送りいただき本当に嬉しく、いつもそれを思い出して、その手紙を読んでおります。

それなのに亡くなられたとは、お気の毒です。近いと又私足がよければ、お悔みにゆきたい。そしてまた靖国神社へもお参りしたいと、心ははやれども足がきかず残念です。せめてお香なりと、今の会長さんからお供えしていただきとうございます。少しですが、二千円送りますが、半分はバッヂ代にしあとは会長さんからおせん香を立ててあげて下さいませ。又申しおくれましたが、昨年マーシャルへ遺骨収集へおいでのときは、珍らしい島のえはがきありがとうございました。自分の子が住んでいたところ又ここに眠っている、ここですごしていたといろいろ想像をして暮しております。有りがとうございました。私は外はどうもない、ただリューマチで足が悪くて歩くのがこんなんですが会長さんのおたよりをいつもたのしんで、おまちして居ります。どうかこののちもよろしく、会のお世話をお願い申し上げます。会員の皆々様もお元気におすごし下さいませ。

戦記シリーズの新掲載について

事務局

環礁19号（6頁）に「クェゼリン島の今と昔」の改版の予告を発表し、環礁20号（16頁）で、その希望者を求めた。クェゼリン島に限られていることと、希望の方は38年発行当時に、購入されたため、今回改版希望者は二百名に達しなかった。このため19号でお約束したとおり、改版の計画は取止めざるを得なくなった。

ただ二百名には足りなかったが、その方々は改版を熱望される方達ばかり、中には子孫に遺したいからと十冊要望された方もあった。

このため本部で役員会議を行って対策を検討した結果

1、クェゼリン島の今と昔と題してあっても内容はマーシャル、ギルバートに共通するものが多い

2、クェゼリン島以外の各島の戦記は断片的には記載されているが、まとまっていない

といった理由もあるので、新たに戦記シリーズという頁を設けて、クェゼリン島の今と昔を、五回にわけて全文掲載する。そのあと各島毎の戦記をのせるということにしました。

具体的には毎号6・7・8・9頁の4頁を戦記シリーズに充てる。この4頁は、皆様方がぬきとって、別綴として綴っていただく。差しあたり今回は次の頁を戦記シリーズの第1頁として4頁までとする。次号では5・6・7・8頁とするから、戦記シリーズの綴は1頁から8頁までとなる。環礁が現在のまま続けば昭和52年1月発行の環礁26号で終り、27号からは他の島の戦記を次々に掲載するということになる。

次に環礁19号で改版したものを希望なさった方で、代価をお送り下さった方がありますが、それはこの際全部郵便局の「定額小為替」をこの環礁に同封してお返しします。予約金を送ったのに「定額小為替」が入っていなかったという方があったら至急お知らせ下さい。尚会計整理の必要上同封の領収証に御住所、ご氏名ご記入、捺印の上送り返して下さい。

新入会の喜び

神奈川　露木千鶴

お知らせ下さった内容、私はこんなお話は何もかも始めてのことばかり、一つ一つ今日までの皆様のご苦心のご様子を思い浮べながら感謝一ぱいで読ませていただきました。

新聞紙上等でよく遺骨収集の記事を見ますが人事のように思っていました。今度こうして私の夫の戦地マーシャル諸島の霊を慰め、遺骨を迎える、身近なお話を伺い、ひしひしと胸に迫り今更ながら当時を思い出しております。夢にも願えなかったブラウン島の霊砂厚く御礼申し上げます。米軍を介しお取り寄せ下さったとか。南洋の戦地の様子、私たちには全然想像もつきません。早速お仏前に供えさせて頂きました。会長様は私たちのためご高齢にもかかわらず大変なお仕事をお骨折下され本当にありがとうございます。

こうして蔭のお力により、この度この環礁を読ませていただき、はじめていろいろなことを知りました。

私も既に二十年間公務員として学校に勤めながら四人の子女を育て今日迄過して参りました。今では生活にはどうやら不自由なく過しております。私も運よく戦死者の妻として遺族年金も戴けました。これも皆様のお蔭と思い深く感謝いたしております。私は長年女一人で一家を支えて参りましたので、若い者たちとは別に、今だに私の仕事が抜けきれず何かと忙がしく過しております。今では娘たちの孫も増えました。末娘も去る四月結婚し親の役目も果しました。

それでもなお自分の大切な仕事を持っていることに気持だけでも若さを保つように努力しています。

靖国の妻

本部事務室　安藤サヨ

午前九時半。もうそろそろお見えになる筈と心をはずませ乍らお札所と、参集所の間の人波をかきわけ、目をお皿のようにしてさがしました。何しろ秋季例大祭の当日祭の日なので、老若男女、特に地方から見えたらしいお年をめした女の方が多いようでした。やがて10時10分前になったのでもうお上りになったかと思い私も到着殿から参入しました。探せるかどうかあせるばかり。到着殿も参集所も、身動きならない混雑なので祭典前はあきらめました。

祭典開始の合図の大太鼓がお腹にこたえる程ひびきました。修祓そして神官のお話の間も落ちつかず三、四分の時間が半日ほどにも感じました。

私のお探している方は、以前門司市にお住いだった坂本ヤスエ様、昭和44年頃迄は毎年かかさず参拝されたのに環礁11号が局から戻された後は、毎号戻されるので心配でした。それが10月2日懐しい筆跡で、会長さん宛

「私十月に靖国神社祭があると聞き、お参りしたく存じますので、神社祭のある所をお知らせ願えればと思いお願いする次第です。誠にすみませんが、所と時間と何日という詳しい事をお知らせ下さいませ。詳しいことはお逢いの節。お願いまで」（原文のまま）とのはがきでした。早速会長さんのお指図により神社からの招待状に詳しい説明をつけお送りしました。

やがて昇殿参拝が始まりましたが、参拝終って御神酒をいただく所でお待ちしました。見遁しては大変とお一人お一人気をつけました。やっと第三組の終り頃、私の記憶よりおやせになっているようでしたが、坂本さんらしかったのでお尋ねしてみたところ「ハイそうです」と耳にしましたとき、咄嗟に英霊のお引き合せと、涙がとまりませんでした。

昭和45年観光バスにのっていた処、暴走して来たダンプに衝突され、首の骨をいためて一年半の入院、退院後一年半の通院によって、どうやら歩行はできるようになったこと、それで会長さんにお願いし参拝に来たこと、今朝九時に東京駅について、神社に直行、午後の列車で京都の親戚に寄って門司に帰る一人旅であること、会長さんのお知らせで、まず遺品館の副碑の前に立ったが懐さのあまり胸が一ぱいになり泣けて泣けて去りがたく、上から周囲から撫でまわして、やっと別れてきたとそのときも泪をためておられたこと、体の調子さえよければ、2月6日はもとより春秋の例大祭に参拝に来たいこと、神社境内で求めた梔子その他二本、植木屋から買われたサツキの鉢を大事に大事にかかえてかえられたことなど今なお頭から離れず、坂本ヤスエ様どうかお幸せに、明年もお待ちしていますと祈りつづけました。

親から受け継いだもの

井上賀雄

去る十月十二日、海兵五十二期卒業五十周年記念特別級会が、東京高輪で盛大に開催され、私共遺族も参加させて頂きました。生憎の雨模様にも拘らず、全国各地から多数参集され、中にはお孫さん達大家族を引連れたオジイチャマなど。何十年振りの再会に、生き生きとした挨拶を交わされているクラスの方々同士の会話、様子に接するうちに「私の親父も生きていたら、同じ様だろうなア――」と秘かに思うものでありました。

司会の方から、出席者全員、一人一人の紹介があり、特に、私共遺族の紹介に当っては、亡き戦友の面かげを忍び乍ら、当時のエピソードなどをおり交ぜてお話し頂きました。親父の順番になり、『井上は外面はオトナシイ様にみえても、内に秘めた情熱は計り知れないものがあった。何か一つのことを決めたら頑として、そのことをやり通す―』。

故人に対する讃美があったかも知れませんが、親父と一緒に生活することの少なかった私にとって、私の知り得なかった親父の一面に接して「ハッ」とした感動を禁じ得ませんでした。まさに現在の私に、通ずるものであり、よく血筋は争えないとか言いますが、親子の性格は自然に引継がれて行くものかと、しみじみ思うのであります。

父の名は梅二郎。その生家（佐世保）の近くに梅の森があり、毎日の通学にはその森を通って行った由。当時、父は親から、『お前は毎日あの「梅の森」に見守られているのだから、しっかり勉強しなさい』。と言われ頑張った甲斐あって、海兵に合格したという話を誰かに聞いた記憶がありますが、現在の私達兄妹は、マーシャルの孤島に散った父、その許に行った母、等先祖に守られて毎日を過ごしているという気持になるとき、何故か、さきほどの「梅の森」の話を想い出す私達です。親父が戦死した当時、私は小学六年。支那事変から大東亜戦争に続いて戦地勤務（私の記憶だけでも、上海、漢口、テニアン、ラバウル、北千島、マーシャル等）の多かった親父に、私は手紙を通して色々と教えてもらったことを想い出します。現在同じ小学六年の息子の父親になっている私が、親父から受け継いだものを、強いて教えこまなくても、自然にまた息子が、引き継いで行くものと思うと身の引き締まるものを覚えます。

今、息子のしぐさ行動をみていると時々、我身をみる思いがして、反省することしばしばであります。これからも、機会ある毎に発見するであろう親父から受け継いだものを大事に、息子の為に示してやりたいと念願致します。

三十年の想い出を偲んで

新潟県　高林セキ

歓呼の声に送られて、夫が入隊したのは昭和18年の夏、以後一度の面会もなく、翌19年2月6日クェゼリン島で戦死しました。当時私は結婚1年8ケ月、子供は生れて8ケ月目でした。

子供は義母に見て貰い、義父と二人で農業に従事していました。慣れない農作業は手間がかかり雨期の長い年は七月になっても田植は終りませんでした。終戦後間もなく義弟二人は復員して来ました。様々な事情から結局私は別居する身となりました。町の実家の近くに間借りし、そこから織物工場へ勤めることになり、勤めの合間に娘時代習った和裁の内職に寸暇も惜しみ、身を粉にして働く日々でした。私もまだ若かったが、あの戦後の混乱の中で子供を抱えての生活は苦闘そのものでした。

食糧難、そして買出し、時には休暇を利用しての〃かつぎ屋〃も苦しみや悲しみの中で子供だけが心の支えでした。幸い丈夫に育った息子も今は31歳、亡き夫の年齢を過ぎ、優しい嫁を迎えて孫二人ようやく幸せを噛みしめている毎日ですが、夫が健在でいたなら今年丁度六十歳、何人かの子供にも恵まれて、皆が一緒に暮らせていたであろうに……などと、戦争の惨めさが泌々身にしみます。

又あの時、夫の遺骨を迎えに、遺骨といっても、小さな箱に白い紙が一枚、その遺骨をしっかりと胸に抱き涙にくれたあの日、あれから、いつしか、三十年の月日は流れて、私の背も丸くなってきました。私たちの肉親が尊い血汐を流したクェゼリン島の砂を、仏前に供え霊砂として拝むとき、あの頃を偲ぶのも私一人ではあるまいと思います。（昭和48年11月19日受）

こぼれ文

振替貯金払込用紙の通信欄より

滋賀　中川　英次

環礁毎号楽しみに読ませて頂いております。母も年をとりましたので字が読めません故、私が読んで聞かせております。

岡山　森尾きし江

母一人となり淋しい毎日ですが、先日のルオットの最期の記事には思わず声をあげて泣きました。

エボン島のリッサングサングさんに送る

浮田信家

一

リッサングサングさんお元気ですか。去年11月20日エボン島でお会いした日本の浮田です。今のあなた方には日本語の授業がなく、この手紙は読めないでしょうから、あとは校長先生のアムラム・ピー・アリック様かその奥様に読んでいただいて、お話をきいて下さい。（ここまでは英語）

今から七年前の8月2日私達ののっていたラリック・ラタックという船は真夜中にナウルからマジュロ島に向う航海中でした。そのときマジュロのドワイト・ハイネ（支庁長）さんから船長あてに「エボンに重病患者あり、その患者を乗せて、マジュロに至急帰れ」との指令でした。船長はすぐエボン島に針路をかえ、翌3日の早朝エボンにつく予定でした。ところが赤道に近いエボン島の附近には8月頃になると東に流れる海流が強く、一日に20浬も流されていたため半日もおくれてエボンにつき、患者さんと附添の方と生れたばかりの赤ちゃんの三人が船に収容され、倉庫の棚の下段に落付きました。船はすぐ錨を上げて、出港しました。いつもは島々でコプラを集めて動いている荷物船ですから船中にはコプラが醗酵した臭気がみちており、患者さんは苦しかったと思います。三日にマジュロ入港予定が四日にのびました。その晩私は、丁度患者さんの真上の棚に寝たのですが、エンジンの回転する激しい音の中に、患者さんの苦しそうな呻き声が聞こえ、お気の毒で眠れませんでした。

左から二人目校長先生
三人目リッサングサングさん

私と同行の佐竹エスさん（小学校の養護教諭、看護婦免状所持の方）は朝からずっと患者につき添っていました。10日程前に五人目のお子さんを出産した34歳の産婦さんの容態が案ぜられたからでした。症状は産後腹膜炎を起したらしかったが、船医もいない本船では、手の施しようなく、万一の場合のため佐竹さんが持ち合せたリンゲル注射を二回行って、何とかしてマジュロ病院入院まで生命を保たせたくて汗みどろの努力をしたがその甲斐なく入港直前静かに息をひきとりました。

私はすぐに拝みにゆきました。丁度すやすや眠っておられるように、おだやかな、美しいお顔でした。持ち合せたお線香で日本の習慣に従って焼香しました。赤ちゃんはいきのとまった母の側にスヤスヤと眠っており附添の方は泣き崩れておりました。私たちは、亡くなった方が誰なのか、何一つ知ることなく、ただ心の底からご冥福を祈り、赤ちゃんの将来に幸あれかしと祈りつづけました。

二

それから六年、私は思いもかけず、日本政府が行う戦死者の遺骨収集団と一緒に再びエボンに行けることになりました。あのときの赤ちゃんは元気なら七歳の筈。元気ならあのときの様子を話してあげたいと心をはづませながら11月19日エボンにつきました。六年前マジュロでお目にかかったトコサン様に逢い、あの時の赤ちゃんがあなたであることがわかり、20日に学校にゆき校長先生のお取計いでお目にかかれました。リッサングサングさんよかったですネ。元気に私のところにいらしたとき、そして校長先生が通訳して下さったとき胸が一ぱいになりました。いつかおわかりになる日がありましようがあのいやな戦争がなかったら日本語であなたに判ってもらえたでしようが、今はアリック校長先生の通訳がなくてはお話ができず涙が流れました。

こんど私がエボン島に行った船は、東海大学丸といって七百噸余の小さな日本の船でした。そしてエボン島からミレ島によって11月28日にマジュロ島に戻って来ましたが、桟橋にアリック校長先生が来て下さいました。私もびっくりしましたが、東海大学丸のあとコプラ集貨船の便があったので、歯の痛むあなた達のお友達を連れてマジュロにおいでになったそうです。ケビンにご案内していろいろお話しをお聞きしました。

リッサングサングさん体を大事にして元気で暮して下さい。おじいさん、おばあさんそして校長先生のおっしゃることをよく聞いて、丈夫な立派な人になって下さい。日本の私はいつもお祈りしています。お手紙がかけるようになったら、様子をしらせて下さいね。

さようなら

昭和五十年二月六日（水）

前夜祭＝二月五日夜九段会館
慰霊祭＝二月六日　靖国神社
直会旅行＝二月六・七日　日光
の御案内

昨年盛大な三十年祭を無事済ませましたが、又二月六日が近づきましたので、六日前後の事御案内いたします。

⊙前夜祭（二月五日夜　九段会館）

会場は有明の間

電話　〇三―二六一―五五二一

同じ立場の会員同志一人でも多くの方々と語り合い、又英霊と起居を共にした帰還将兵のお話やら現在の現地事情など伺うことにしています。

九段会館宿泊者と都内、近県在住会員御一緒に午後五時より約二時間の予定で会食をし、懇談致します。

参加希望者は同封のはがきでお申込下さい。

九段会館に宿泊を希望される方は、宿泊月日、氏名、男女別、年令をはっきり書いて**一月十日迄**に料金添えお申込下さい。宿泊料は一泊二食付一人に付三、〇〇〇円です。（会食費共）

前夜祭に参加して宿泊をしない方は会食代一、二〇〇円のみとなります。

⊙慰霊祭（二月六日　靖国神社）

午前九時　受付開始（参集所）

午前十時　昇殿参拝

⊙定期総会（靖国神社参集所）

午前十一時　定期総会は例年九段会館でしていましたが今年は靖国神社の参集所で行います。

午前十一時半解散し、直会旅行に参加の方は解散後直ちに靖国神社境内からバスで出発します。

⊙直会旅行会（二月六日、七日　日光）

〇乗物　大型デラックス観光バス

〇宿泊　栃木県　川治温泉

国観連　柏屋ホテル

電話　〇二八八―八―〇〇〇二

〇参拝、拝観　東照宮、陽明門、二荒山神社、輪王寺、日光廟大猷院、眠り猫、鳴滝、お化燈籠等

〇費用と申込

参加費　小学生以上　一人　八、八〇〇円

（一泊四食付）宿泊料、往復バス代、拝観料、六日と七日の中食代、車中の茶菓代とも。

申込は一月十日迄に。料金添え、氏名男女別、年令をはっきり書いて下さい。申込順に受付けて、一月十日又はその前でもバスの定員に達した時〆切りますので早目にお申込下さい。

〆切の後は、電車で行くことを承知の方だけお受けします。（但し旅館に空室あれば）

⊙「日光を見ずして結構を謂う勿れ」

とは昔も今も変りありません。

冬の日光とはいえ、バスも旅館も中食所も暖房完備です。東照宮の朱塗の回廊はスリッパを使えませんので厚手のソックスか足袋をお持ちになる方がよいと思います。

⊙旅行日程

二月六日、総会終了次第、バスは中食の弁当を積込んで靖国神社前から首都高速、東北自動車道を一路川治温泉柏屋ホテルに向います。胃腸病、神経痛、リウマチスに効くという温泉で暖ってから例年の通り楽しい直会の一と時をすごします。

二月七日、朝食を済ませ、バスは名物の杉並木の道を東照宮に向います。参拝、拝観、中食の後、往路を逆に帰り、東京駅着は午後六時、九段会館には六時二十分帰着の予定です。

⊙日光とところどころ

日光山は今から約一二〇〇年前の奈良朝の昔、勝道上人の御開基で、後坂上田村磨呂の祈願、弘法大師、慈覚大師の来山あって堂宇数多建立され、源頼義、頼朝、実朝等源家代々の信仰厚く、鎌倉期には仁澄法親王が座主となられ以来皇族座主が続き一山隆盛、天台宗の霊場となった。

徳川期の天和三年、家康の遺命によって久能山から移葬して神廟と称し、正保二年に東照宮の宮号を賜った。

慶安四年には三代家光の廟大猷院も山内に建てられた。

◇杉並木は東照宮造営奉行をつとめた松平信綱が二十年の歳月を費して植えたもので現在約一六、〇〇〇本あり特別天然記念物になっている。

◇神橋は、開山勝道上人が架けられたと伝えられ、総朱塗り。二八メートル

◇三仏堂は当山第一の伽藍で、平安期の初期に慈覚大師来山のおり、仁明天皇の勅願によって創建された。

◇陽明門は丹青豪華精巧を極め終日見ても見あかぬとして「日暮し門」とも呼ばれる。日光のシンボルとして世界に知られる。

◇薬師堂内陣天井の竜の顔の下に立って拍手をすれば金鈴のような妙音をひびかせるので鳴竜といわれる。昭和三十六年焼失したが、四十年に復元された。

（佐藤宗丕）

寄付者芳名

（六七名）

今期もまた左に掲げますとおり、多数の有志の方からの御寄付をいただきました。厚く御礼申上げます。

ここに載せました会員の方からは、寄付の外に四十九年までの会費は全部いただいております。中には五十、五十一年と先々までの分を前納下さっている方も多数ありますことを申添えます。

環礁を御覧下さってお悦びのお便りをいただいたり、寄付の御送付によって経済的の御協力をお考え下さる実情に接し、会長はじめ役員一同張り合いを感じ努力をつづけております。

（昭和49年6月30日から昭和49年10月31日までに入金の分）

寄付額　芳名　（敬称略）

篤志会員その他

二〇〇〇〇　松岡　実殿
九〇〇〇　フサコ・サンボーン殿
徳原　勇殿
大里　殿
五〇〇〇　チェンバーレーン・和子殿
ディビー英子殿
一〇〇〇　珊瑚会殿

訂正　前号寄附者芳名中福田義雄は福岡義雄の誤りです謹んで訂正いたします。

◇北海道
六〇〇　父　西村　保

◇青森県
一〇〇〇　兄　池田　精治
〃　弟　下川与三郎

◇宮城県
二〇〇〇　新田富美子

◇秋田県
一〇〇〇　妻　畠山　タカ

◇山形県
五〇〇　父　鈴木　五一

◇福島県
一〇〇〇　兄　佐藤　啓一
〃　母　堺　ヤキ

◇茨城県
五〇〇　父　島　竜

◇埼玉県
一〇〇〇　妻　菅井せい子
七〇〇　妻　柴田　貞子

◇千葉県
三〇〇〇　弟　高山　貞男
一〇〇〇　妻名児耶アキヨ

◇東京都
五〇〇〇　妻　佐竹　エス
〃　弟　昼間　楽平
〃　妹　宇田川ヒサ
三〇〇〇　母　吉田　いそ
二〇〇〇　妻　小野　リエ
一〇〇〇　母　江間イクヨ
〃　長女　神谷　和枝
五〇〇　妻　若松　モト

◇神奈川県
五〇〇〇　妻　露木　千鶴
二〇〇〇　姉　沖立　キヨ
〃　妻　津久井艶子
一〇〇〇　吉水　梅子

◇新潟県
一一〇〇〇　母　後藤　キヨ
五〇〇〇　妻　高林　セキ
二〇〇〇　妻　渋谷セキノ
〃　二男　田村　実

◇石川県
二〇〇〇　妻　寺西ときわ

◇山梨県
二〇〇〇　妻　望月とよ子

〃長野県
一〇〇〇　吉田　喜一

◇岐阜県
二一四五　母　吉沢喜美代
一〇〇〇　上丸　茂

◇静岡県
二一九五　弟　遠藤　清巳
一〇〇〇　妹　石川　みち

◇京都府
二〇〇〇　妻　八木　きよ

◇大阪府
五〇〇　姉　中野フジエ

◇兵庫県
一〇〇〇　妻　江坂　富子
〃　江坂　弘
一〇〇〇　江坂　忠
〃　江坂　紀
〃　江坂由美子

◇島根県
四〇〇〇　妻　園山　和子

◇岡山県
一〇〇〇　母　和気　小歌

◇広島県
一〇〇〇　妻　荒谷ミキヱ

◇山口県
二〇〇〇　妻　内富みつゑ
〃　母　隣　フシノ
一〇〇〇　妻　児玉　富子

◇愛媛県
一〇〇〇　父　長岡　楽三
〃　母　松木ミチル
〃　母　村上サダヨ

◇福岡県
一〇〇〇　母　峯　シマ
〃　妻　森　キヨ子
五〇〇　母　野瀬チトセ

◇佐賀県
二〇〇〇　妻　宮崎　ツヨ
一〇〇〇　母　大串　キサ

◇長崎県
一二五〇　長女　大野美穂子
一〇〇〇　妻　森川　チノ

◇宮崎県
五〇〇　母　杉田ヨシノ

事務局だより

○本号から活字を大きくしました。
今まで環礁の活字は8ポという大きさのものを使っていました。新聞と同じ大きさなのですが小さすぎるというご意見をときどき戴きますので本号から、9ポに替えました。このため記事の内容が減ります。矢張り字は小さくても内容の多い方がよいと思われる方はお知らせ下さい。

○会員章（バッジ）について
このことは環礁の前号事務局だよりでお知らせしましたが、49年度の会費は納めたが、会員章はまだ受けとってない方は至急本部にご請求下さい。

○昭和49年度までの会費をまだお送り下さらない方は、なるべく早く、同封の振替用紙でお送り下さいますようお願いします。できましたら、そのとき50年度の分も一しょにお願いします。会費は49年度分から年額千円になりましたことを申し添えます

○振替用紙同封の意味
今年も正月号に全員振替用紙をお送りしました。従って既に50年度分をお納め下さった方にも同封してあります。50年度会費まで送ったのに又振替用紙を送って来た。何のためかとお気を悪くなさらないようお願いします。発送部数の多いため、このようなことになりますのをお許し下さい。

○浜木綿（浜万年青・文珠蘭）の花
昨48年11月幸せにもクェゼリン・ルオットの日本人墓地を参拝させていただきました。両墓地とも柵内に緑濃い浜木綿が大きな葉を競っていました。あまりの鮮さに、ついほしくなって徳原様にねだって小さな一株をいただきました。東京港迄一ヶ月の航海中葉は枯れ落ち、親の周りの六ツの小さな球根共丸坊主になりました。とても駄目とは思いましたが鉢に植えて、私の部屋で冬を過させ、春庭に出しました。英霊のお援けでしょうか五月に入り次々に六本の芽が出ました。親だけは枯れたのかしばらく出ませんでしたが、七月末、丁度彼岸花のように茎が一本のびてきてやがて蕾がふくらみ、紅橙色の六枚の花弁をもつ美しい花が開きました。親もその後葉が伸び、只今七ツの鉢ですくすく伸びています。
今年の冬は温室で育て、ご希望の方に差上げたいと思います。勿論霊砂同様無料ですが送料だけご負担下さい。ルオットの方に限りません。希望の方は本部にお申込下さい。受けとられた方はまたふやしていただいて、次に希望の方にわけて上げて下さい。何年先のことか判りませんが、多くの会員のお部屋に、お庭に、英霊を偲ぶ南洋の花を咲かす事も心のこもったご供養の一つと思います。
（今年咲いた花の写真ご希望の方にはお送りします。送料共80円）

謹賀新年

昭和五十年元旦

◎本会役員及び篤志会員

名誉会長　朝香鳩彦
顧問　古賀織之助
相談役　朝香孚彦
会長　浮田信家
副会長　佐藤宗丕
常任幹事　井上賀雄
常任幹事　佐竹エス
幹事　秋山正清
幹事　宇田川ヒサ
幹事　岡野正文
幹事　木村久子
幹事　国松ふみ江
幹事　小泉文江
幹事　高橋鎮夫
幹事　萩原金次郎
幹事　橋口昭利
幹事　昼間楽平
幹事　山浦信子
監事　末広正男
監事　大高吉郎
監事　板垣徹
篤志会員　大野克一
篤志会員　嘉村栄
篤志会員　木ノ下甫
篤志会員　ケイス・エスウィリアムス
篤志会員　瀬沼光久
篤志会員　土屋太郎
篤志会員　徳原勇
篤志会員　同徳子
篤志会員　中島昌彦
篤志会員　中田虎一
篤志会員　成田喜代治
篤志会員　西村祐造
篤志会員　長谷川栄次
篤志会員　長谷川敏
篤志会員　林幸市
篤志会員　藤平直忠
篤志会員　松平永芳
篤志会員　村岡達志
篤志会員　横溝幸四郎
篤志会員　安藤サヨ
篤志会員　白鳥悦子
篤志会員　本木光江

お願い

誠に申し訳ありませんが一頁に使用させていただいた雪の社頭の写真お送り下さった方のお名前私の不仕末から紛失しました。お知ら下さいますよう謹んでお詫びの上お願い申します。
（浮田）

本部
郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話（東京）四三一三六一四番